2026 年度　仙台青葉学院大学　学校推薦型選抜
入学試験問題

小論文

受験番号	氏名

［問題］東京大学薬学部の池谷教授は著書の中で、生成 AI について、これまで人間が得意だと思っていた「直観」「想像力」「配慮」といった能力においても、AI の方が優れていることを示した上で、次のように述べている。以下の文章を読み、設問 1～2 に答えなさい。

これまで我々が「人間らしさ」だと思っていたものが、実は AI にとっても得意分野だった。それを知ると、「やはり AI は人間よりも優れている。近い将来、人間は AI に取って代わられてしまうのではないか」と危機感を抱く人もいるかもしれません。ですが、本当にそうでしょうか？

前述の AI が最強の棋士を打ち負かした際、多くのメディアは「人類の完敗」と報じました。

冷静に考えてみれば、囲碁のように計算力が問われる問題を解くのは、むしろ AI が得意とする分野です。人間が苦手だからこそ、人間同士の対局が面白くなるのです。これだけ強力な AI の登場は、囲碁や将棋というゲームを、人間の脳はまだ完全に理解しておらず、さらなる研究の余地があることを示しています。

計算力において、人間は安価な電卓にも及びません。ためしに計算機を片手に暗算競争でもしてみたならば、「すでに人間は計算機にも負けているのだ」と痛感するでしょう。

しかし、これは当然のことです。そもそも人間は、自分たちの能力を補うためにコンピュータをはじめとするツールを生み出し、育ててきたのです。コンピュータに任せている部分は、私たちが苦手な分野でもあります。逆に、私たちが生み出した「我が子」とも言える AI がこれほどまでに成長したことは、喜ぶべきことであり、敗北感を抱く必要はないでしょう。なぜなら、人間が苦手な部分を補完してくれる存在だからです。

いまや AI は、文章や詩、音楽、絵画を生成する能力において、並の人間には到底及ばないレベルに達しています。しかし、AI に何かを追い越されたとしても、「敵」や「ライバル」としてではなく、自分たちの足りない力を補ってくれる誇るべき心強い味方だと捉えるべきではないでしょうか。

AI の出現は、私たちに「真の人間らしさとは何か」を問いかけ、自分を見つめ直すきっかけを与えてくれる機会だと、捉えてほしいと思います。

（中略）

本来、AI が得意な分野を、人間の得意分野だと勘違いすることは、脳の使い方において大きな誤解を引き起こします。

AI は何でもできるわけではなく、欠点や弱点もありますが、人間が苦手なことへのストレスを一部軽減してくれます。部分的ではありますが、AI には創造力や直感に優れた一面があるので、頼るべきところでは頼ってもいいのです。

AI が存在するからといって、人間のすることがなくなるわけではありません。AI にこれまで人がやってきた仕事を任せることは、人間の生きる価値を否定することにはなりません。むしろその逆で、人間には AI ではできない能力がたくさんあり、その価値は決して失われません。

本当に人間らしい部分とは、自分が意識せずに自然にできることです。いちいち意識して苦労しなくては実現できない能力は、真の意味で「人間らしい」とは言えません。人間らしさとは、発想力や直感、気遣いといった、あえて意識しなければできないこととは異なります。

では、人間らしさとはなんでしょうか。

たとえば「楽しむ」という行為はその最たるものです。囲碁を楽しむ人は多くいます。AI から見たら合理性のない下手な囲碁かもしれませんが、だからといって囲碁を楽しむ価値がなくなるわけではありません。むしろ、上達する過程や、仲間と切磋する楽しさは、勝敗という尺度だけでは測れない部分があります。

たとえ AI がどれだけ囲碁に強くても、それが人の価値を奪うわけではありません。

感情的になったり、大喧嘩をしたりすることも含めて、人間らしさです。人間の価値はまだまだたくさんあります。AI の得意なことができなくても、人間の価値は損なわれません。さらに言えば、本来は人間が苦手なことを AI に任せ、自分たちは人間らしい行為に特化することで、「本来人間がするべきこと」に脳の使い方が特化されるはずです。

出典：池谷裕二『生成 AI と脳　この二つのコラボで人生が変わる』、扶桑社、224-228、2024 年、一部改変

設問 1.　この文章の筆者は、AI に対してどのような考え方をしているか。200 字以内にまとめなさい。

設問 2.　医療や介護の現場では、AI が検査や記録などを担うことが増えている。あなたが、AI に任せても良いと思うことと、人間が行った方がよいと思うことを一つずつ挙げ、その理由を 600 字以内で説明しなさい。